

「イタリア古典歌曲」研究（2）

—— S. パルンボ編曲によるアレッサンドロ・スカルラッティの歌曲 ——
Arie Antiche Study (II): The Arias of Alessandro Scarlatti Transcribed
by S. Palumbo.

中 卷 寛 子

NAKAMAKI Hiroko

The main purpose of my ongoing study on “*Arie Antiche*” is to provide correct information regarding this very popular song group. The present paper deals with four songs which were originally arias in Alessandro Scarlatti’s operas: “Spesso vibra per suo gioco”, “Se tu della mia morte”, “Se Florindo è fedele” and “Son tutta duolo”. The familiar versions of these songs were published in the late nineteenth century by Alessandro Parisotti in his famous *Arie antiche*, vol.1 (Milano: Ricordi, [1885]). However, they were in fact all based on the edition transcribed and published by Salvatore Palumbo as *Capolavori de’ classici napoletani: Sei arie inedite del cavaliere Alessandro Scarlatti* (Napoli: Stabilimento dei musicali Partenopeo, [1853?]).

Firstly, the information on Palumbo’s edition is presented. Then, to gain a better understanding of the song text, the plots of the operas and the situations of the scenes in which the arias are sung are considered. Finally through the comparison with contemporary manuscript scores of Scarlatti’s operas, Palumbo’s transcriptions are discussed.

キーワード：イタリア古典歌曲、アレッサンドロ・スカルラッティ、
サルヴァトーレ・パルンボ
Arie Aniche, Alessandro Scarlatti, Salvatore Palumbo

はじめに

声楽家にとって非常に馴染み深いレパートリーである、「イタリア古典歌曲」を追究する本研究の一環として、今回はアレッサンドロ・スカルラッティ（1660-1725）のオペラ・アリアに基づく4つの歌曲、《しばしば戯れに矢を放つ Spesso vibra per suo gioco》、《お前が私の死の栄光を Se tu della mia morte》、《フロリンドが誠実なら Se Florindo è fedele》、《私は悩みに満ちて Son tutta duolo》を採り上げる。

アレッサンドロ・スカルラッティはバロック期のイタリアを代表する声楽曲の作曲家である。ナ

ポリとローマを中心に活躍した彼は、その生涯に少なくとも66作品ものオペラと、600曲を超すカンタータを作曲した。その多作さと、さらには素朴でありながら流麗な旋律の魅力のゆえにでもあろう、「イタリア古典歌曲」の中にも、彼のアリアを編曲したものが数多く存在している。そして、それらについてもまた、長年に渡って広く流布して来た曲の大半が、アレッシンドロ・パリゾッティ(1853-1914)編による『古典アリア集 Arie antiche』(全3巻、1885-1900)に収録されているものであった。

『古典アリア集』の収録曲については、パリゾッティ自身が作曲当時の一次資料から直接に編曲したものと長らく信じられて来た。しかし、近年では、この曲集の少なからぬ数の曲が、19世紀になってから出版された楽譜を直接の原典としていることが判って来ている。本稿で採り上げる4曲もまたその例外ではない。これらはいずれもパリゾッティの『古典アリア集』第1巻に収録されているのだが、実はそのすべてが、『古典アリア集』よりも30年以上も先に出版された、サルヴァトーレ・パルンボ編曲による『ナポリ古典の傑作。騎士アレッシンドロ・スカラッティの知られざる6曲のアリア *Capolavori de' classici napoletani: Sei arie inedite del cavaliere Alessandro Scarlatti*』(Napoli: Stabilimento dei musicali Partenopeo, [1853?])の楽譜を原典とし、それをほぼそのまま再利用したものだものである。¹

そこで、本稿では4つの歌曲をパルンボ編曲版を中心に検証することとし、まずはこの『ナポリ古典の傑作。騎士アレッシンドロ・スカラッティの知られざる6曲のアリア』そのものについて紹介して行く。次に、各曲の歌詞の内容をより良く理解するために、出典となったオペラのストーリーや、それぞれのアリアが歌われる場面等について解説を加える。これについては、これまでほとんど資料が無かったために、もとのアリアが男性によって歌われるものなのか、女性によって歌われるものなのかでさえが判っていない場合もあったので、演奏者にとってはいささかなりとも関心のあるところであろうと思われる。そして、その解説の後に、同時代の総譜と編曲版との比較に基づいて、パルンボによる編曲の状況を確認して行くこととする。

1. 『ナポリ古典の傑作。騎士アレッシンドロ・スカラッティの知られざる6曲のアリア』

『ナポリ古典の傑作』は、表題の地で楽譜出版業を営んでいた、スタビリメント・ムジカーレ・パルテノペーオ社(以下、スタビリメント社と略記する)から出版されたシリーズ楽譜で、『騎士アレッシンドロ・スカラッティの知られざる6曲のアリア』は、シリーズの第1年次に刊行されたものである。残念なことに、実用譜には有りがちなことなのだが、楽譜自体には出版年が記載されていないために、この楽譜の正確な出版年は判らない。しかしながら、スタビリメント社は1809年の創業以来、19世紀中に何回か社名を変更しており、「スタビリメント・ムジカーレ・パルテノペーオ」と名乗っていた時期は1853年からの3年間ほどしかない。² 従って、この楽譜もその

1 パリゾッティはパルンボの楽譜の音楽的なテキストには、ほとんど手を加えていない。彼がパルンボの音楽を変更した点としては、歌唱声部が万人に歌える音域になるように移調したことがその最たるものであり、そのほかにはメトロノーム記号や発想記号、強弱記号、スラー等を追加する、あるいはそれらが付けられている位置を多少変更するといったことを行っている程度である。従って、『古典アリア集』に収録されたこれらの曲の楽譜については、パリゾッティがパルンボ編曲版を更訂し、再録したという言い方をする方がより実情に近いと言えるだろう。

2 Seller, F. "Girard; Cottrau; Stab. musicale partenopeo," in *Dizionario degli editori musicali italiani 1750-1930* (Roma: Edizione ETS, 2000), p.176.

間の年代に出版されたことは間違いない。さらに、同社名義の『ナポリ古典の傑作』シリーズは、その後、第2年次にはドメニコ・チマローザとジョヴァンニ・パイジエッロ、第3年次にはジョヴァンニ・バッティスタ・ペルゴレージの作品を出版しており、このことからすると、『騎士アレッシンドロ・スカラッチの知られざる6曲のアリア』は、スタビリメント社としての最初の年である、1853年に出版された可能性が非常に高いと言える。³

さて、この曲集のタイトルにもうたわれている6曲のアリアとは、1. 《お前が私の死の栄光を》、2. 《このバラは香りが薄い Meno odorosa è questa rosa》、3. 《私は悩みに満ちて》、4. 《しばしば戯れに矢を放つ》、5. 《フロリンダが誠実なら》、6. 《花から花へと渡るように Come va di fiore in fiore》である。そして、各曲の楽譜の第1ページ目上部には、以下のような項目が印刷されている。ここでは第1曲目の《お前が私の死の栄光を》のものを例として挙げておく。

① タイトル

ナポリ古典の傑作／音楽新聞の予約購読者への贈り物／第1年次／6曲の知られざるアリア／騎士の／アレッシンドロ・スカラッチ

CAPOLAVORI DE' CLASSICI NAPOLITANI / STRENNA AGLI ASSOCIATI DELLA
GAZZETTA MUSICALE / ANNO PRIMO / SEI ARIE INEDITE / DEL CAVALIERE /
ALESSANDRO SCARLATTI

② 版權について

版權所有版

Edizione di Proprietà

③ 楽譜番号と販売価格

No.10710. 王立音楽学校資料室に登録[?] / Gr.20

No.10710. Dep.to nell' Archi.o del R. Coll.o / Gr.20

④ 編曲者について

サルヴァトーレ・パルンボ氏がスカラッチの低音からピアノ用伴奏を作成した

Il Maestro Salvatore Palumbo, ha ricavato l'accompanimento del Pianoforte dal Basso dello
Scarlatti

まず、タイトルに付随した記述から判ることは、このシリーズ楽譜は、スタビリメント社が1852年から1868年にかけて発行していた『ナポリ音楽新聞 Gazzetta musicale di Napoli』の予約購読者向けの頒布品として製作されたものだったらしいということである。一方、楽譜番号とともに残された「王立音楽学校資料室」の文字は、スタビリメント社と同校の密接な関係を物語っている。スタビリメント社は、1819年以来、いわば王立音楽学校御用達の出版社、楽譜商であった。⁴

3 筆者が参照した楽譜では、第3年次のものについては表題が『ナポリ派の傑作 Capolavori della scuola napoletana』となっていた。

4 Seller, op. cit., pp.173-176.

編曲者のサルヴァトーレ・パルンボについては、残念ながら、その経歴は不明である。しかし、当時の王立音楽学校の後身である、ナポリのサン・ピエトロ・ア・マイエツァ音楽院の図書館には、彼の作曲作品が今も多数残されている。その中でも特に数が多いのが宗教曲である。そして、それらの楽譜の中には王室礼拝堂であったパラティナ礼拝堂の名が記されているものがいくつか存在している。このことから、パルンボは同礼拝堂ゆかりの作曲家、ひいては当時の地元の有力音楽家の一人ではなかったかと推測される。

次に、6曲のアリアの出典だが、これについては1、4、6がオペラ《十人委員会の凋落 *La caduta de' decemviri*》(1697)、2、3、5が《女もまた貞節 *La donna ancora è fedele*》(1698)であることが、現在では判っている。しかし、出典についてはどの楽譜でもまったく言及されていない。おそらくは、パルンボが編曲の際の原典とした楽譜に、出典に関する記述が無かったためであろう。そして、また、その原典についても出版譜には何ら記載されていない。しかしながら、筆者は、現在サン・ピエトロ・ア・マイエツァ音楽院が所蔵している、Rari 6.7.23 の請求記号を持つ手稿譜が、とりあえずはその有力候補として挙げられるだろうと考えている。その理由としては、この楽譜がスカラッチェのオペラ《十人委員会の凋落》と《女もまた貞節》からのアリアと二重唱を集めた曲集であり、パルンボが選んだ6曲すべての楽譜がこれ一冊に含まれていること、さらには、総譜との比較の結果、パルンボ編曲版の音楽は総譜よりはこちらに一致する点が多いこと（本稿の3を参照のこと）が挙げられる。⁵

2. 4つのアリアの出典と歌詞について

(1) オペラ《十人委員会の凋落》とアリア《しばしば戯れに矢を放つ》、《お前が私の死の栄光を》

それでは、いよいよパルンボ編曲版のもとになったアリアと、それらが含まれているオペラの内容に踏み込んで行くことにしよう。2つのアリアの出典である、オペラ《十人委員会の凋落》は、1697年12月15日にナポリのサン・パルトロメーオ劇場で初演された。台本はシルヴィオ・スタンピーリア (1664-1725) によるもので、物語はリウィウス (B.C.64? - A.D.12?) の『ローマ建国史』から題材を得ている。主な登場人物とあらすじは、以下のとおりである。⁶

5 [Alessandro Scarlatti] Composizioni vocali operistiche, manuscript, I-Nc, Rari 6.7.23.

残念ながら、筆者は今のところこの手稿譜については未見である。情報はICCUのオンライン・カタログに基づいている。以下を参照のこと。http://www.sbn.it/opacsbn/opaclib?db=iccu&select_db=iccu&nentries=1&from=19&searchForm=opac/iccu/error.jsp&resultForward=opac/iccu/full.jsp&do=search_show_cmd&rpnlabel=+Tutti+i+campi+%3D+Se+tu+della+mia+morte+&rpnquery=%40attrset+bib-1++%40attr+1%3D1016+%40attr+4%3D2+%22Se+tu+mia+morte%22&totalResult=21&fname=none&brief=brief

6 あらすじについては、以下の出版譜の巻末に添えられた英訳台本に基づいている。

Alessandro Scarlatti, *La caduta de' decemviri*, ed. by Hermine Weigel Williams, vol.6 of *The Operas of Alessandro Scarlatti* (Cambridge/ Massachusetts, London: Harvard University Press, 1980).

【登場人物】

アッピオ・クラウディオ	十人委員。ヴィルジーニアに横恋慕する
クラウディア	アッピオ・クラウディオの姉妹。ルーチョを愛する
ヴァレーリア	ローマの貴婦人。アッピオを愛する
ルーチョ・ヴィルジーニオ	ローマの軍人
ヴィルジーニア	ルーチョ・ヴィルジーニオの娘
イチーリオ	ローマの市民。ヴィルジーニアの婚約者
セルヴィーリア	ヴィルジーニアの若き養育係
フラッコ	アッピオの家人

【あらすじ】

紀元前5世紀のローマ。近郊の山地ではローマ軍がアエクイ、ウォルススキの軍と対峙していた。そうした折に開催されたコーンスス祭の競技場で、十人委員の一人であるアッピオが集まって来た女性たちを物色していた。そして、彼の目に留まったのが、軍の実力者であるルーチョの娘、ヴィルジーニアであった。ヴィルジーニアに心奪われたアッピオは彼女に言い寄るが、イチーリオという婚約者のあるヴィルジーニアは容易になびかない。業を煮やしたアッピオは卑劣な手段で彼女をわが物にしようとする。すなわち、自家の家人であるフラッコに、ヴィルジーニアは自分のもとから赤子の頃にさらわれた奴隷娘だと主張させ、彼女を強引に奪おうとしたのである。しかし、そこにイチーリオとヴァレーリアが割って入り、事の真偽は法廷で争われることになる。だが、その争いの裁判官を務めたのが、他ならぬアッピオであった。アッピオはヴァレーリアを奴隷と認め、フラッコに返還するようにとの判決を下す。それに対して、イチーリオはヴァレーリアの父、ルーチョを戦地から召喚するよう要請し、彼の到着までは判決を延期するよう求める。アッピオもこれに同意する。

娘の危難を聞き、ルーチョが戦地から戻って来る。しかし、アッピオが裁判官とあっては判決が覆る筈もない。追いつめられたルーチョは、娘の名誉を守るためにはヴィルジーニアを殺す以外に方法がないと決意し、彼女を剣で刺す。事ここに至って、アッピオの専横に民衆の怒りが爆発し、暴動が起こる。アッピオは一度はローマの郊外へと逃れたが、イチーリオとヴァレーリアに発見され、連れ戻される。ルーチョ、イチーリオ、さらに、一命を取り留めたヴィルジーニアもアッピオの死を求めるが、誰もがクラウディアとヴァレーリアの嘆願に心を動かされ、彼を許すことにする。しかし、ここに十人委員会は崩壊し、その権限を失ったのである。

以上がオペラ《十人委員会の凋落》の中心的な物語である。そして、これにアッピオの姉妹であるクラウディアとルーチョの恋、アッピオを愛しながらも振り返ってもらえないヴァレーリアの葛藤といったシリアスな要素や、ヴィルジーニアの養育係であるセルヴィーリアとフラッコのカップルによるコミカルな場面が挿入され、物語全体が多面的に構成されている。

さて、パルンボが採り上げたアリアのひとつである、《しばしば戯れに矢を放つ》は第1幕第15場でクラウディアによって歌われる。この場面では、援軍要請のため、戦場から一時的にローマへ戻ったルーチョが、援軍の準備が整ったことをアッピオに報告しに彼の宮殿にやって来る。そこで、ルーチョはクラウディアと出会い、会話の中で彼女を愛していることを暗示する言葉を残して去る。ルーチョを愛していたクラウディアは、彼の言葉の意味に気づいて喜ぶが、身分違いの恋ゆえにそれをはっきりとは明かせぬルーチョの立場を思いやり、言葉の意味に気づかなかったふりをしようと思いつきながら、このアリアを歌うのである。

Spesso vibra per suo gioco	しばしば戯れに矢を放つ
Il bendato pargoletto	あの目隠しをした幼子は
Strale d'oro in humil petto	金の矢を卑しき胸に
Stral di ferro in nobile seno.	鉄の矢を高貴な胸に
Poi languendo in mezzo al foco	すると、相反する火矢がともした
Del diverso acceso strale	炎の只中でやつれ果て
Per oggetto non eguale	心通わせられぬ相手のために
Questo manca e quel vien meno.	こちらは死に、あちらは気を失う

言うまでもなく、「目隠しをした幼子」とはキューピッドのこと。キューピッドは金の矢で恋心を燃え上がらせ、鉛の矢で相手を嫌わせるというが、ここでは鉄の矢となっている。つまり、このアリアはなかなか思い通りにはならない恋の様子を歌っているわけだが、実際のオペラの中では、自分と想いを寄せる相手が相思相愛の関係にあったのだと知った女性によって、幸せを心に秘めて歌われるアリアだったのである。

一方、《お前が私の死の栄光を》は第3幕第13場でアッピオによって歌われる。ローマの郊外に逃れ、身を潜めていたアッピオは、イチーリオとヴァレーリアに見つけれ、捕えられる。イチーリオがその場を離れると、ヴァレーリアはアッピオに対して、それまでの不実で横暴な行いをなじる。アッピオは心からの後悔をヴァレーリアに告げるが、気丈な彼女はそれに耳を貸さず、彼に死ねと言い放つ。それに対する答えがこのアリアである。

Se tu della mia morte	お前が私の死の栄光を
A questa destra forte	この強い右手に
La gloria non vuoi dar	与えたくないのなら
Dalla a i tuoi lumi.	それをお前の瞳に与えよ

E il dardo	そして
Del tuo sguardo	その射るようなまなざしが
Sia quello che m'uccida	私を殺す矢となり
E mi consumi.	私を消滅させればいい

このアリアを歌った後、アッピオは衛兵に付き添われてその場を立ち去る。そして、一人残されたヴァレリーアは、残酷な言葉を口にしながらも、実はアッピオを愛している、その苦しい胸の内を独白するのである。

(2) オペラ《女もまた貞節》とアリア《フロリンダが誠実ならば》、《私は悩みに満ちて》

オペラ《女もまた貞節》は《十人委員会の凋落》初演の翌年、1698年にやはりナポリのサン・バルトロメーオ劇場で初演された。台本はドメニコ・フィリッポ・コンティーニ (fl.1669-87) が創作し、1676年にベルナルド・パスキエーニ (1637-1710) が作曲した同題のオペラ台本に基づいている。登場人物とあらすじは以下のとおりである。⁷

【登場人物】

アリドーロ	ナポリの騎士
ロベルト	騎士。アリドーロの友人で、リザウラの恋人
リザウラ	ナポリの貴婦人
フィランドラ	リザウラの乳母
セルヴィーノ	アリドーロの庭師
フロリンダ	セルヴィーノの娘と思われている。アリドーロを愛する

【あらすじ】

ナポリの若き騎士アリドーロは、世の中に貞操堅固な女性などはおらず、恋愛にうつつを抜かすなどは愚かなことと思っていた。だが、そんな彼も、ある日、偶然にも庭師の娘フロリンダが自分に想いを寄せていることを知り、心が揺れ始める。アリドーロはフロリンダの心を試すために、友人のロベルトに彼女を誘惑してみてくださいと頼む。その一方で、自分はロベルトの恋人であるリザウラに恋をしているとフロリンダに偽りを告げ、恋の仲介をするように命じて、彼女にさらなる動揺を与えるように仕組む。その間にも、依頼を受けたロベルトはフロリンダに言い寄るが、彼女は決して応じない。しかし、ロベルトがフロリンダに言い寄る場面を、リザウラの乳母であるフィランドラが目撃し、そのことをリザウラに告げたため、事態は混乱し始める。ロベルトに裏切られたと思っただりザウラは、彼への当てつけのために、アリドーロからの恋の使いとしてやって来たフロリンダに、求愛を喜んで受け入れると答えて、彼女を落胆させる。そして、その場面を垣間見て

⁷ *La donna ancora è fedele* (Napoli: Dom. Ant. Parrino e Michele Luigi Mutio, 1698).

いたロベルトとの仲は険悪になってしまう。一方、希望を失ったフロリンダは自殺を企て、危ういところでアリドーロに止められる。そして、彼を愛していることを直接に打ち明ける。これによって、フロリンダの愛を確かめたアリドーロと、自分に宛てた手紙でリザウラの本心を知ったロベルトは、彼女らに改めて愛を告げる。彼らに騙されていたと知った二人は、初めはなかなか彼らを信じられなかったが、やがてはその愛を受け入れる。しかも、セルヴィーノの告白によって、フロリンダが彼の実の娘ではなく、高貴な家の出であったことが明らかになり、アリドーロとの身分違いも解消されて、すべてが丸く納まる。

さて、イタリア古典歌曲の《フロリンダが誠実なら》の原曲は、このオペラの第1幕第2場において、アリドーロによって歌われる、アリア《フロリンダが誠実なら》である。この場面は、冒頭でアリドーロが女性への不信感を述べていると、すぐ近くにフロリンダが現れ、アリドーロに聞かれているとも知らず、彼への想いを独白する。そして、彼女が彼に気づかぬままに去ったのちに、彼は隠れていた場所から出て来て、このアリアを歌うのである。

Se Florinda è fedele	フロリンダが誠実なら
Io m'innamorerò.	私は恋するだろう
Potrà ben l'arco tendere	箠を付けた射手は
Il faretrato Arcier,	弓を引き絞るがいい
Ch'io mi saprò difendere	私は誘惑するような眼差しから
Da un guardo lusinghier,	身を守るすべを知っているのだから
Prieghi, pianti, e querele	祈りも、涙も、哀願も
Io non ascolterò,	私には通用しない
Mà se sarà fedele	だが、彼女が誠実であれば
Io m'innamorerò.	私は恋するだろう

スカララッティよりは一世代ほど年長であっただろうと思われる、コンティーニが創作したこの歌詞は、本来はダ・カーポ形式のアリア用には書かれていない。しかも、本来の歌詞は「フロリンダが心変わりしなければ Se Florinda è costante」から始まる第2節を持つ有節形式になっていた。スカララッティはその第1節のみを利用し、最初の2行とその後の8行とに分けて、それぞれをダ・カーポ・アリアのA、Bの部分として作曲したのだ。そして、パルンボのピアノ伴奏用編曲版を経て、最後にこの曲の歌詞を「フロリンダが誠実なら」と女性の言葉に変更したのはパリゾッティである。

一方、《私は悩みに満ちて》は、第1幕第5場でフロリンダによって歌われるアリアだ。この場面では、恋に悩んでふさぎ込むフロリンダの様子を心配した父親のセルヴィーノが、何とか彼女を元気にさせようと散歩に誘い出す。そして、このアリアの後で、セルヴィーノはフロリンダの気鬱

の原因がアリドーロへの恋にあることを打ち明けられるのである。

Son tutta duolo	私は悩みに満ちています
Non hò che affanni	私には苦しみしかありません
E mi dà morte	そして、残酷な苦痛が
Pena crudel,	私に死を与えるのです
E per me solo	私にとっては
Sono tiranni	星も、運命も、
Gl'astri, e la sorte,	神も、天も
I numi, e il ciel.	暴君なのです

3. 4つのアリアの音楽について

次に、各曲の音楽について見て行こう。まず、パルンボの編曲版をスカララッティと同時代の総譜と比較してみた結果について、4曲に共通している点を挙げると、いずれの曲の場合も、パルンボの編曲は原曲をかなり忠実に再現しており、特に歌唱旋律や通奏低音の声部にはあまり手をいれずに、そのまま利用していた。さらに、この時期に出版された、他の編曲者による古典歌曲にしばしば見られるような、原曲の一部を省略したり、原曲にはない部分を新たに創作して挿入したりといったことも一切行われていなかった。ただ、いくつかの箇所では、原典に由来すると思われる相違が筆者の参照した総譜との間で見られた。この点について、1曲ごとにより詳細に見てみよう。⁸

まず、《しばしば戯れに矢を放つ》だが、このアリアの原曲は、歌と2本の独奏ヴァイオリンと通奏低音という編成で、48小節から成っている。一方、パルンボ編曲版は38小節しかないが、これは原曲の前奏（7小節）と後奏（3小節）が省略されているためである。そして、残された部分の歌と通奏低音の旋律については、総譜と完全に一致している。だが、その一方で、2本の独奏ヴァイオリンの旋律はピアノ伴奏にはまったく反映されておらず、ピアノ伴奏は通奏低音をレアリゼーションし、単純な和音を添えただけになっている（譜例1 a, b）。

原曲をかなり正確に引き写しているにも関わらず、通奏低音以外の楽器パートが編曲版には反映されていないという状況については、《お前が私の死の栄光を》も同じだと言えるかも知れない。もっとも、このアリアの場合は元来が通奏低音のみの伴奏によるものなのだが、アリアの直後に添えられている、ヴァイオリン2声部とヴィオラ、通奏低音から成るリトルネッロの部分がパルンボの編曲版にはない。もし、パルンボが参照した原典にこのリトルネッロが存在していたならば、これが後奏として利用されていても決して不思議ではなかったはずだ。

このように、編曲版の伴奏に原曲の通奏低音以外の楽器パートが反映されていないこと、さらには、編曲版の出版譜に出典となったオペラの題名が言及されていないことから、パルンボが参照

⁸ 参照した手稿譜は以下のものである。

Alessandro Scarlatti, *La caduta de' decemviri*, manuscript, I-Nc. 32.2.26-28; Idem., *La donna ancora è fedele*, manuscript, I-Nc. Rari 7.1.3.

し、これらの曲を編曲する際の原典とした楽譜は、筆者が参照した総譜のように完全なものではなく、先に挙げた Rari 6.7.23がそうであるように、アリアの歌唱声部と通奏低音だけを抜粋した、不完全なものであったと考えられる。また、《お前が私の死の栄光を》に関しては、筆者が参照した総譜のすべてにおいて、通奏低音の冒頭のリズムは付点音符を含むものとなっていたが、パルンボの編曲版では八分音符のみになっている（譜例2）。おそらくは、この違いもまた、彼の参照した原典に由来するものであろう。⁹

譜例 1 a 《しばしば戯れに矢を放つ》手稿譜 I-Nc:32.2.26, fol.108v (第1小節～第12小節)

Violin I, Violin II, and Bassoon parts for the manuscript score. The vocal line includes the lyrics: *Spes - so - vi - bra per suo - gio - co il - ben - da - to Per - go - let - to*

譜例 1 b 《しばしば戯れに矢を放つ》パルンボ編曲版 (第1小節～第5小節)

Vocal and basso continuo parts for the edited version. The tempo is marked *Allegro*. Dynamics include *f*, *marcato*, and *cresc.*. The lyrics are: *Spes - so - vi - bra per suo - gio - co il - ben - da - to per - go - let - to*

譜例 2 《お前が私の死の栄光を》 上) 手稿譜 I-Nc: 32.2.28, fol.73v (第1小節～第3小節)

下) パルンボ編曲版 (第1小節～第3小節、伴奏低音部のみ)

Two staves of the basso continuo part, comparing the manuscript (top) and the edited version (bottom).

9 [Alessandro Scarlatti.] Composizioni vocali operistiche, manuscript, I-Nc, Rari 6.7.23 に含まれる《お前が私の死の栄光を》の楽譜では、通奏低音の当該部分は八分音符である。

《フロリンダが誠実なら》に関しては、やや状況が違っている。というのも、この曲だけが例外的にパルンボの編曲のピアノ伴奏に原曲のヴァイオリン・パートが反映されているからだ。そして、基本的にピアノの左手が通奏低音を、右手がヴァイオリン・パートと和音を演奏するようにして伴奏が作り上げられている。¹⁰ しかしながら、ヴァイオリンが1声部のみのアリアに続く、ヴァイオリン2声部とヴィオラと通奏低音から成るリトルネッロに関しては、やはりこの曲の場合も編曲版からは省略されている。

さらに、オペラ《女もまた貞節》から採られたアリア2曲については、筆者が参照した総譜との間で、臨時記号の相違とそれに伴う和声付けの相違が見られた。すなわち、転調に際して、総譜の方ではそれまでの調の調号や臨時記号をはっきりと取り消して、整然と次の調へと進行しているのに対して、パルンボの編曲では前の調の臨時記号を引きずったまま、いささか強引に突き進んでいる場合がある(譜例3~5)。これは臨時記号を書いたり、書かなかったりという、スカラッティ時代の記譜に原因があったのだろう。曖昧な記譜が、その楽譜を参照し、そこから新たな楽譜を製作した者の判断を誤らせたのだ。但し、その誤りを犯したのが必ずしもパルンボだったとは限らない。パルンボが参照した原典が製作される時点ですでにそうした誤りがあって、パルンボはその原典に忠実であっただけだという可能性も考えられるのである。

譜例3 《フロリンダが誠実なら》 上) 手稿譜 I-Nc: Rari 7.1.3, p.13 (第31小節~第37小節)

下) パルンボ編曲版 (第31小節~第37小節)

The image displays two musical staves for comparison. The upper staff is the original manuscript, featuring three parts: Violin (Vn), Alto (Altidoro), and Bass (Bc). The lower staff is the Palombini edition, featuring Violin and Piano accompaniment. The lyrics are: 'a' inna-co-re - rà, a' inna-co-re - rà, io a' in - na - co - re - rà.' The Palombini edition includes performance markings such as *p*, *rall.*, *cresc.*, *f*, *a tempo*, and *p dolce*. The piano part in the Palombini edition is marked *p* and *imitando la voce*.

¹⁰ [Alessandro Scarlatti.] Composizioni vocali operistiche. manuscript, I-Nc, Rari 6.7.23 に含まれる《フロリンダが誠実なら》の楽譜には、例外的にヴァイオリン・パートが存在している。

譜例4 《私は悩みに満ちて》 上) 手稿譜 I-Nc: Rari 7.1.3, p.37 (第8小節～第11小節)

下) パルンボ編曲版 (第8小節～第11小節、ピアノ伴奏のみ)

譜例5 《私は悩みに満ちて》 上) 手稿譜 I-Nc: Rari 7.1.3, pp.37-38 (第21小節～第25小節)

下) パルンボ編曲版 (第21小節～第25小節、ピアノ伴奏のみ)

おわりに

パリゾッティ版の原典となったパルンボ編曲版は、19世紀の他の編曲者によって自由に作曲し直されたとも言われるようなイタリア古典歌曲が多い中で、それらとは違い、スカラッティの原曲をかなり正確に再現したものであった。しかしながら、そこには原典の不完全さに起因すると思われる不備や誤解がいくつか見られた。だが、それも、パルンボが編曲を行った当時は、音楽資料の所在に関する情報が乏しく、複数の資料を比較検討するなどということが不可能に近い状況であったという事情を思えば、やむを得ぬ仕儀であったと言えよう。ただ、パルンボ編曲版における不備や誤解は、それを再利用したパリゾッティ版にもそのまま受け継がれている。演奏者はそのことを知ったうえで、演奏をすべきだろう。あるいは、パルンボ版(パリゾッティ版)のそれらを補正して演奏を行うという選択肢もあるのではないだろうか。

今回、パルンボ編曲版と総譜の比較に関しては、音の異同に注目するのみに留まった。だが、実際のパルンボの楽譜には、彼独自の判断で加えられたスラー、アクセント、スタッカート等、種々の記号がある。そして、そこにこそ、パルンボのそれぞれのアリアに対する解釈が見られたはずであり、演奏者がそれらを演奏する際に参考となるものもあるはずである。しかし、残念ながら、ここで紙面もほぼ尽きたことであり、これについてはまたの機会に採り上げることとしたい。